

多肥上町店舗新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

多肥平塚遺跡Ⅱ

2021年12月

株式会社恵比寿天
高松市教育委員会

例 言

- 1 本報告書は、多肥上町店舗新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書であり、多肥平塚遺跡の報告を収録した。
- 2 発掘調査地及び調査期間は次のとおりである。

調査地	高松市多肥上町字平塚 1091 番地 4
発掘調査	令和 2 年 10 月 26 日～10 月 28 日
整理作業	令和 2 年 10 月 29 日～令和 3 年 9 月 31 日
調査面積	36 m ²
- 3 発掘調査及び整理作業は高松市教育委員会が担当し、その費用は株式会社恵比寿天が全額負担した。
- 4 現地調査は、高松市創造都市推進局文化・観光・スポーツ部文化財課文化財専門員 高上拓・佐藤容、同会計年度任用職員 磯崎福子が担当した。
- 5 整理作業は高上・佐藤が担当した。
- 6 本報告書の執筆及び編集は佐藤が担当し、高上が補佐した。
- 7 本調査に関する以下の業務を委託した。
遺物写真撮影：西大寺フォト
- 8 本報告書の高度値は海拔高を基準とし、座標は国土座標第IV系（世界測地系）に従った。また、方位は座標北を示す。
- 9 遺構断面の注記の色調及び土器観察表の色調は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖 36 版』を参照した。
- 10 本報告書の挿図として、高松市都市計画図の 2 千 5 百分の 1 と、1 万 2 千 5 百分の 1 の地図を一部改変して使用した。
- 11 発掘調査で得られた全ての資料は、高松市教育委員会で保管している。

目 次

第1章 発掘調査の経緯と経過

第1節 発掘調査の経緯	1
第2節 発掘調査及び整理作業の経過	1

第2章 地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2

第3章 発掘調査及び整理作業の成果

第1節 試掘調査結果	5
第2節 調査の方法	6
第3節 基本層序	6
第4節 発掘調査成果	6

第4章 総括

挿 図 目 次

第1図 高松平野における多肥平塚遺跡の位置	1
第2図 多肥平塚遺跡周辺の遺跡分布図	4
第3図 試掘調査地位置図	5
第4図 出土遺物（14トレンチ）	5
第5図 調査地区位置図	6
第6図 遺構配置図・土層断面図	7
第7図 出土遺物	8

表 目 次

第1表 出土遺物観察表（試掘調査）	5
第2表 基準点座標一覧	6
第3表 出土遺物観察表（本調査）	7

写 真 目 次

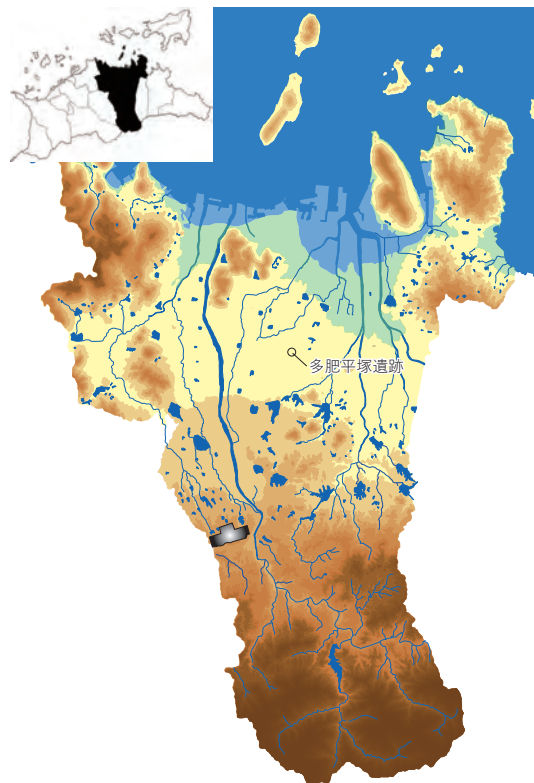
調査地区全景 道跡（南から）	I	土坑（南から）	II
道跡（南から）	I	完掘状況（南から）	III
道跡（東から）	II	遺物写真	III
西壁 断面（東から）	II		

第1章 発掘調査の経緯と経過

第1節 発掘調査の経緯

高松市多肥上町字平塚1091番地4において店舗新築工事が計画された。事業地は、周知の埋蔵文化財包蔵地「多肥平塚遺跡」の隣接地であることから、令和2年3月4日付けで事業者から本市教育委員会（以下、市教委）に埋蔵文化財の試掘調査依頼が提出された。依頼を受けて、市教委は同年2年3月23日～26日及び4月10日～14日の期間に試掘調査を実施し、事業地内の一部で遺構や遺物を確認した。

その後、事業者から令和2年8月25日付けで文化財保護法第93条第1項に基づく発掘届出が提出された。建物基礎の一部が遺跡を壊す恐れがあったため設計変更等の協議を行ったが、遺跡に影響のある工事掘削は避けられず、市教委から香川県教育委員会（以下、県教委）へ進達したところ、同日付けで県教委より工事着手前に店舗建設箇所の一部を発掘調査するようにとの行政指導があった。これを受けて事業者と市教委で協議を行い、発掘調査を実施し記録保存を行うこと及び費用面の合意が形成されたことから、事業者と業務を管理する高松市、調査・整理作業を管理する市教委の三者で、同年10月9日付けで埋蔵文化財調査協定書を締結し、「多肥上町店舗建設工事に伴う埋蔵文化財調査管理業務」として、埋蔵文化財の発掘調査を実施することとなった。



第1図 高松平野における多肥平塚遺跡の位置

第2節 発掘調査及び整理作業の経過

発掘調査の対象となったのは、事業地内で店舗建設箇所の一部である。

発掘調査は令和2年10月26日から開始し、同年10月28日に埋め戻しが完了して、現地での作業は終了した。主な調査経過は下記のとおりである。

- 10月26日（月）重機で第1遺構面まで掘削。道跡を検出した。
- 10月27日（火）道跡の掘削。第2遺構面まで掘削し、土坑を検出した。
- 10月28日（水）道跡と土坑の掘削。調査区完掘状況写真を撮影して、全ての作業を終了した。

調査終了後、令和2年10月から整理作業を開始した。10月に遺物洗浄を行い、11～12月にかけて遺物の接合や実測、令和3年1～4月にかけて遺構・遺物のトレース作業を行った。また8月～12月にかけて原稿の執筆・編集作業を進めた。なお整理期間中に、出土遺物の写真撮影を西大寺フォトに委託して実施した。

第2章 地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

高松市は東西に長い香川県の中央やや東よりに位置し、讃岐平野の一部を形成する高松平野が市域の大部分を占める。高松平野は、北に瀬戸内海、西は五色台山塊に接し、南の讃岐山地から流れる香東川や、春日川、新川等の河川の働きにより形成された、扇状地性の沖積平野である。これらの河川の流れは高松平野に農耕に適した土壤をもたらしたが、中流域では伏流し地表の流路は涸れ川になることが多く、水不足解消のため早くからため池が造られてきた。平野部各地に点在するため池は、年間1,000ミリ前後と降水量の乏しい讃岐平野において農業用水確保のために不可欠なものである。高松平野を流れる諸河川の中でも最大規模の香東川は、平野形成に最も大きな影響を及ぼした。かつては石清尾山山塊の南麓で東西に分かれて河口へ注いでいたが、近世期に行われた香東川の改修以降、東側の流路は水田地帯及び市街地の地下に埋没している。なお、17世紀の廃川直前の流路は現在、御坊川として今でもその名残を留めている。

本遺跡のある多肥地域は香東川の東方、高松平野のやや南部にあり、北側の太田地域とともに、旧香東川の伏流水と湧水（出水）が各所にみられる地域である。

第2節 歴史的環境

本遺跡のある多肥上町は、近世の上多肥村にあたる。明治23年に上多肥・下多肥・出作村からなる多肥村ができた後、昭和31年に高松市に合併されて、多肥上町・多肥下町となり現在の形となった。古くから農耕が盛んで、近代には高松市近郊地域として、茄子やキュウリ等の蔬菜栽培が多く行われた。

本調査地周辺地域においては、香川県立高松桜井高等学校や都市計画道路の建設等に伴う発掘調査が行われ、遺跡の広がりや内容が明らかになってきている。

縄文時代 最も早い時期は縄文晩期の遺跡で、多肥宮尻遺跡（多肥上町）と多肥松林遺跡（多肥上町）で自然河川跡が検出された。旧石器・縄文時代の遺跡はほとんど見られず、弥生時代以降に数が増える。

弥生時代 弥生時代前期に、多肥松林遺跡で溝跡、松林遺跡（多肥上町）で集石遺構、汲仏遺跡（多肥下町）と凹原遺跡（多肥下町）で環濠や竪穴建物が検出されている。

弥生時代中期には、本遺跡の東方、日暮・松林遺跡（多肥上町）・多肥松林遺跡で一続きと推測される集落跡が見ついている。この時期に埋没・平準化した多肥松林遺跡の旧河道からは木製の農具や祭祀道具等が出土した。また、松林遺跡では、竪穴建物等の集落跡に加えて、地震による液状化の痕跡（噴礫）が見ついている。一方、本遺跡の西方に位置する太田原高州遺跡（太田上町）では、中期末～後期初頭にかけての区画墓群があり、主体部から水晶製小玉が出土している。

弥生時代後期には、汲仏遺跡と凹原遺跡の竪穴建物の他、大下遺跡（三名町）で溝状遺構と竪穴建物がみられる。また日暮・松林遺跡や多肥松林遺跡でも多数の竪穴建物や灌漑水路跡が検出されている。

古墳時代 古墳時代は中期以降の遺跡がみられる。中期から後期の竪穴建物が多肥宮尻遺跡で、後期から終末期にかけての竪穴建物が多肥北原遺跡や多肥北原西遺跡、太田高州遺跡で検出されている。

古代 古代の多肥地域について、平安時代「和名抄」に香川郡十二郷のうちの一つとして「多配郷」の名がみえる。「多配」の地名は、大和朝廷の直轄領「屯倉」を耕作した部曲の民「田部」が住んでいたことに由来する。

奈良時代の遺構として、多肥北原西遺跡の溝から、鬼瓦等の古代瓦や多口瓶、鉄製品等のほか、9世紀の掘立柱建物が検出されている。この遺跡は「見性寺林」の小字が残る多肥廃寺の北側に位置し、多肥廃寺の建立・経営に伴う諸施設の存在が推測されている。平安時代前半には、多肥松林遺跡では主水源の減少に伴い、大規模な灌漑水路の整備が継続して行われた。灌漑水路や主水源となる流路から、斎串や人形、墨書土器などの祭祀道具が出土している。また、同時期の掘立柱建物等、屋敷跡もみられる他、帯金具や硯、緑釉陶器も出土している。

中世から近世 中世前半には、多肥松林遺跡で掘立柱建物や耕作跡などの小規模な屋敷跡が見られ、日暮・松林遺跡では13世紀初めの旧河道の底から瓦器碗が出土している。松ノ内遺跡では、古代から中世にかけての溝と、13～14世紀頃の建物跡が検出された。中世後半から近世にかけての遺跡は乏しく、松林遺跡で中世後半の条里遺構がみられるほか、日暮・松林遺跡で近世の溝や土坑が検出されている。また本遺跡の南東には、室町時代に乃生元忠が築いたとされる高木城跡（多肥上町）がある。乃生元忠はもと坂出市高屋郷の神谷氏の子孫で、元忠の代に多肥郷に移ってきたとされ、天正18年に香西氏との戦いで敗れ、この時に高木城も焼失したといわれる。現段階では調査は行われていないため遺構の詳細は不明である。

中世の「多配郷」については当時の文献にいくつか登場する。鎌倉時代前期の歌人藤原定家が著した日記「明月記」には、定家が「讃岐一村（多配郷）」の給付を受けた記述がある。これは関白九条道家の長女である後堀河天皇中宮に仕えた定家の娘の出仕費用に充てるため、当時の讃岐知行国主であった道家より一時的に給付されたという。また、室町・戦国期には、明德元年8月3日の中沢信明譲状と永正4年6月12日の中沢道忍譲状から、丹波国大山荘地頭である中沢氏の一族が、讃岐国多配郷内にある「うなさかのやしろ」を相伝の所領としていたことが見える。さらに下って、天正19年、生駒親正の知行宛行状（大山家文書）に「香東郡たい村」とあり、大山入蔵が村の50石の知行を与えられている。

近世には、平塚1号塚で近世以降の石囲が検出されている。近世を通じて多肥村の石高は1300石前後ととても高く、寛永19年高松藩政下になる頃、上多肥村・下多肥村に分かれた。近世に条里地割に沿って造られた幹線水路の多くが近・現代まで維持されている。



- ①：本調査区 1：多肥平塚遺跡 2：多肥松林遺跡 3：松林遺跡 4：多肥宮尻遺跡 5：日暮・松林遺跡
 6：多肥北原遺跡 7：多肥北原西遺跡 8：北原遺跡 9：多肥廃寺 10：お茶荒神 11：出口遺跡 12：空
 港跡地遺跡 13：拝師廃寺 14：上林本村遺跡 15：畑遺跡 16：弘福寺領讃岐国田図調査地 17：宮西・
 一角遺跡 18：池の内遺跡Ⅰ 19：池の内遺跡Ⅱ 20：凹原遺跡 21：多肥下町下所遺跡 22：波仏遺跡
 23：野郷遺跡 24：高木城跡 25：井出上・中所遺跡 26：西久保遺跡 27：日暮・松林遺跡 28：松ノ
 内遺跡 29：平塚1号塚

第2図 多肥平塚遺跡周辺の遺跡分布図

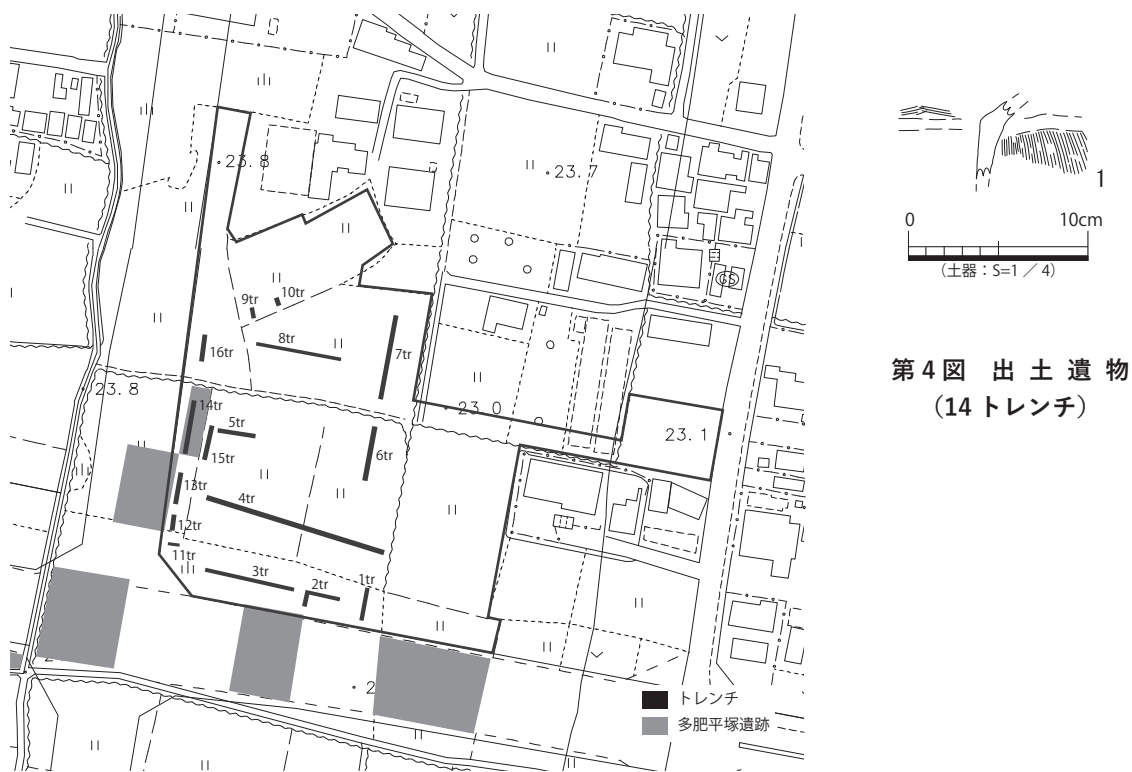
参考文献

高松市教育委員会『キモンドー遺跡』1999年3月
 高松市教育委員会『凹原遺跡』2001年12月
 高松市教育委員会・社会福祉法人恩賜財団済生会支部香川県済生会『日暮・松林遺跡（済生会）』平成15年9月30日
 香川県教育委員会『多肥平塚遺跡』2013年1月
 香川県教育委員会『太田原高州遺跡1』2014年11月14日
 香川県教育委員会『多肥松林遺跡』2017年3月
 高松市教育委員会『日暮・松林遺跡（第11次調査）』平成30年3月31日
 高松市教育委員会『松ノ内遺跡』令和2年3月31日
 高松市教育委員会『太田下・須川遺跡（第5次調査）』令和3年3月31日
 角川書店「角川日本地名大辞典 37 香川県」昭和60年10月8日
 四国新聞社「香川県大百科事典」昭和59年6月20日

第3章 発掘調査及び整理作業の成果

第1節 試掘調査結果

本調査区を含む多肥平塚地区で令和2年3月23日～26日及び4月10日～14日の期間に試掘調査を実施した(第3図)。その結果、対象地の最も西側の区画で埋蔵文化財の包蔵状況が認められた。調査面積は約268㎡で、16箇所のトレンチの内、14トレンチが本調査区の南側に位置する部分である(第4図)。1は14トレンチの南側の溝跡から出土した土師器の鍋である。溝は黄褐色シルト及び灰色砂礫層(地山)に掘り込まれており、1の他にも古代の土師器片がまとまって出土している。



第3図 試掘調査地 位置図(縮尺=1/2500)

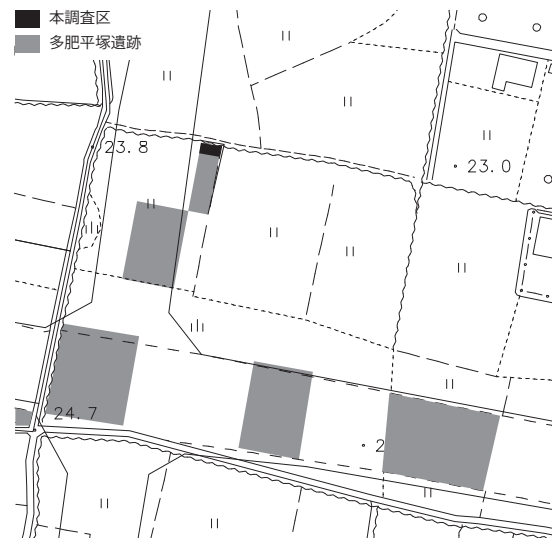
第1表 出土遺物観察表(試掘調査)

遺物番号	遺構	種類	器種	法量 (cm)			文様・調整		色調 (左=外面、右=内面)	胎土	焼成
				口径	底径	器高	外面	内面			
1	14tr 溝	土師器	鍋	—	—	3.5	ヨコナデ、タテハケ	ヨコハケ、ヨコナデ	5YR5/6明赤褐、5YR5/6明赤褐	普通 3mm以下の石英・長石・雲母含む	良

第2節 調査の方法

調査区は、店舗のスロープ設置箇所にあたる部分である（第5図）。東西に長く、東端には現代の水路が南北方向に通り、分断されている。

掘削は重機によって遺構上面を検出したのち、人力による遺構埋土の掘削を基本とした。記録に際しては、調査地の北・南に2点の基準点を設け（Y-3・Y-4）、実測を行った。現地での遺構平面図、断面図は1/20で作図した。写真はデジタルカメラで記録し、補助的にコンパクトデジタルカメラを用いた。以上の記録資料及び出土遺物は市教委で保管している。



第5図 調査地区 位置図（縮尺 = 1/2500）

第3節 基本層序（第6図）

遺構検出面は、第1遺構面が3層（にぶい黄褐極細砂～シルト層）の上面、第2遺構面が8層の上面である。第1遺構面では、3層上面の土が固く締まった道状の遺構が検出された。出土遺物はわずかであり、3層の中及び上面から土師器片、須恵器片が見つかった。また第2遺構面では土坑が検出された。8層（褐色極細砂層）は直径2～20 cmの砂岩円礫を含み、洪水など河川に運ばれた土砂が堆積してできた地山と考えられる。

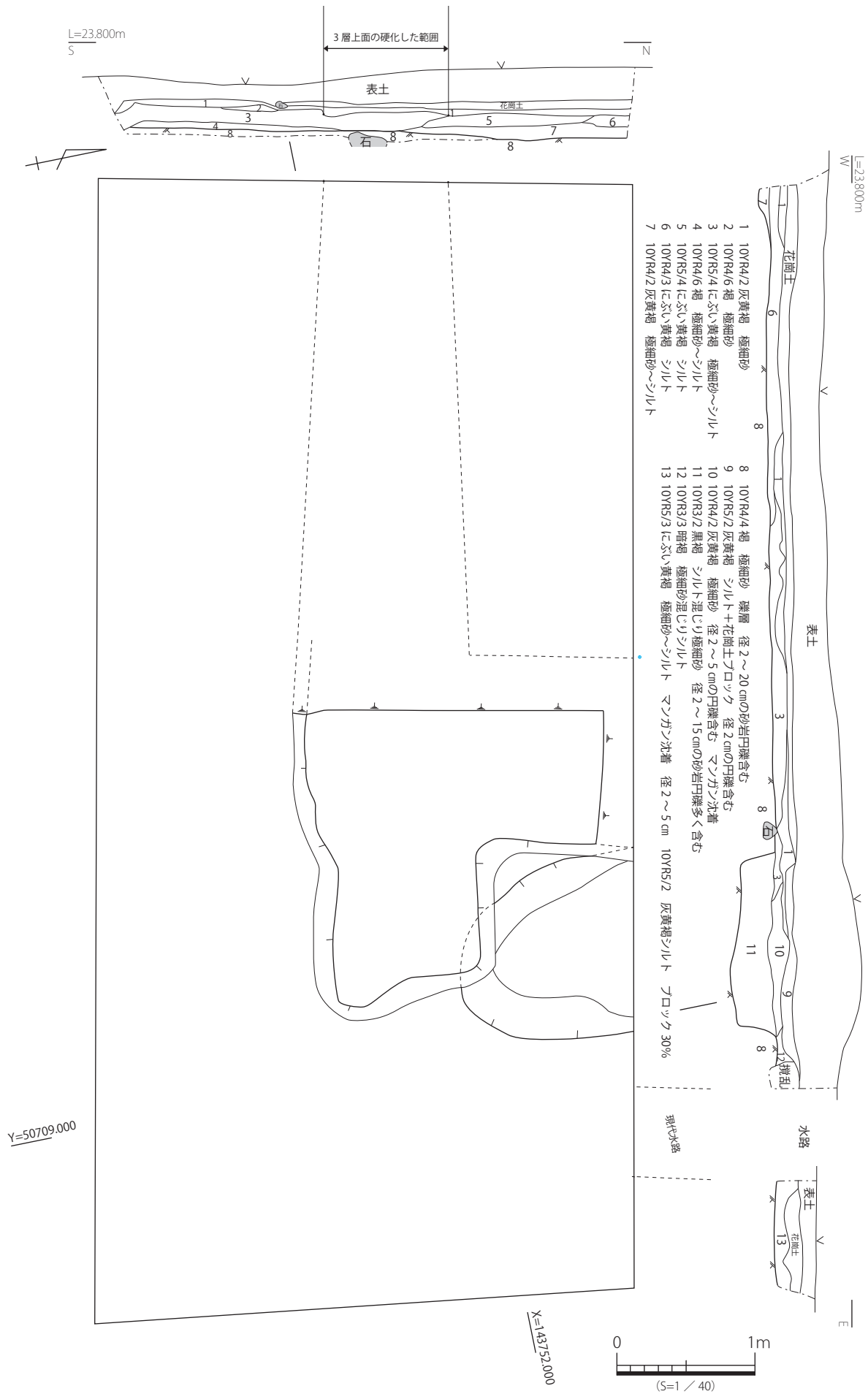
第2表 基準点座標一覧

	X座標	Y座標	Z座標
Y-3	143730.462	50693.419	23.756
Y-4	143765.844	50669.104	23.661

第4節 発掘調査成果

土坑 土坑の埋土は、砂岩円礫を多く含む黒褐色シルト混極細砂層である。遺物は出土しておらず用途・時期ともに不明だが、後述する道跡の下から検出されたため、道より古い時期に掘削・埋没したと考えられる。

道跡 調査の経過として、まず現地表面から30 cm程度の深さで、黄褐色系統のシルト層（3・5・6・10層）を遺構面と推定して遺構検出を行った。掘削は西から東に向かい順に重機で行ったが、この段階では明確な遺構は存在しないと判断した。このため、下面の遺構面の検出を目的として、再度重機で西側から掘削を行い、地山と考えられる8層上面まで掘削を進めたが、この過程で、局所的にシルト層が非常に堅緻になっている箇所が存在することが判明した。具体的には、重機でも削りあぐねるほどであった。同質の堆積土が局所的に固くなる現象の背景に、人為的な踏み固めの可能性が想定できると判断したため、重機掘削を中断し、再度検出作業を行ったところ、第6図に示した範囲に硬化した土壌が分布することが判明した。西壁の断面観察から既に重機で削平してしまった範囲にも同様に硬化面が存在することが確認でき、平面T字形に展開することが推定できたため、この硬化面は人為的に形成されたものであろうと判断した。ただし、路面造成のための意図的なものか、人の移動の累積による結果的な硬化であるかは判断できなかった。また、工具等の痕跡や

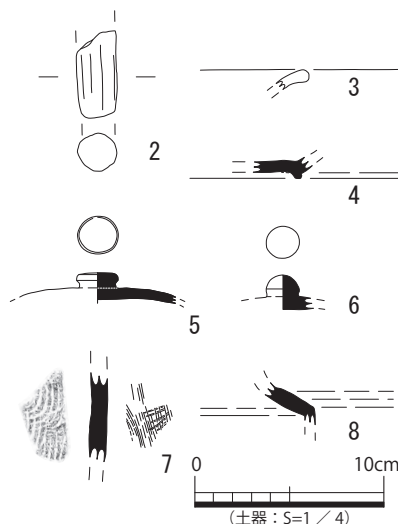


第6図 遺構配置図・土層断面図

版築・敷き粗朶等の工法も確認できなかった。なお、調査区西側に延伸することが断面観察からは想定できるが、交差点の東側にやや突出しつつも調査区東端まで延伸しない見通しである。以上の特徴から、検出した硬化面については「道跡」の可能性が考えられる。道跡とする根拠が硬化面の平面範囲のみによるものであり、補強する根拠が薄弱であることは予め明記しておきたい。以下では、仮称として道跡と呼称し、その特徴を整理する。

幅1～1.2mで東西に延び、途中で北に向かって道が直角に分かれる。3層中からは須恵器や足釜が出土した。3層の精査時、上面からは3、6、8が出土した。3は土師質土器炮烙の口縁である。口縁の形から17世紀代と推測される（佐藤、濱野1995）。6は須恵器杯の蓋で、丸みを帯びたツマミから、I-1～II-1の7世紀中葉～8世紀前葉までの時期と推定される（佐藤1993）。8は須恵器壺の肩である。3層中からは2、4、5、7が出土した。2は土師質土器足釜の脚で、道跡の南側外で出土した。年代の詳細は不明だが、中世以降であると推測できる。4は須恵器杯の底部で、ハの字の高台から、III-3以前の10世紀半ば以前と考えられる（佐藤1993）。また5は須恵器杯の蓋で、平坦なツマミと蓋の形状から、II-2～II-4の8世紀中葉～9世紀前葉の時期に推定される（佐藤1993）。

道跡の時代については、出土遺物から少なくとも17世紀以前に形成、利用されたと推測できる。道が延びる方向は真北から東におよそ12度ほど傾いているため、高松平野の条里地割に沿って形成された道であったと考えられる。



第7図 出土遺物

第3表 出土遺物観察表(本調査)

遺物番号	遺構	種類	器種	法量 (cm)			文様・調整		色調 (左=外面、右=内面)	胎土	焼成
				口径	底径	器高	外面	内面			
2	土層断面第3層	土師質土器	足釜 脚	—	—	4.6	ナデ	ナデ	10YR8/2灰白、10YR8/2灰白	普 2mm以下の石英・長石含む	良
3	土層断面第3層上面	土師質土器	焙烙 口縁	—	—	0.8	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ナデ	10YR6/3にふい黄橙、10YR5/2灰黄褐	普 1mm以下の長石含む	良
4	土層断面第3層	須恵器	杯 底部	—	—	1.1	回転ナデ	回転ナデ	N51灰白、N51灰白	普 2mm以下の長石含む	良
5	土層断面第3層	須恵器	杯蓋	—	—	1.6	回転ナデ、施釉	ナデ	7.5Y4/3暗オリーブ、10YR7/1灰白	普 1mm以下の石英・長石含む	良
6	土層断面第3層上面	須恵器	杯蓋	—	—	1.8	回転ナデ	ナデ	N4/0灰、N7/0灰白	普 1mm以下の石英・長石含む	良
7	土層断面第3層	須恵器	壺 体部	—	—	4.8	タタキのちハケ目	青海波	—	普 —	良
8	土層断面第3層上面	須恵器	壺 肩	—	—	2.2	ナデ	ナデ	7.5YR7/1灰白、7.5YR7/1灰白	普 3mm以下の石英・長石含む	良

第4章 総括

本調査では、東西方向に延び途中から北へ直角に分かれるT字型の遺構が検出された。他と比較して土壌が硬化し、人為的に踏み固められて形成されたと考えられることから「道跡」と推測した。なお、路面造成のため意図的に形成されたものか、人の移動の累積による結果的な硬化であるかは不明である。出土遺物は古代の須恵器や中世の足釜の脚が出土しており、中世以降に道として使用されていたと考えられる。道跡は、現在、本調査地の周辺で見られる土地区画と同様に、全体的に東へ約12度ほど傾いていることから、条里地割に沿って形成されたものと考えられる。

また、北に分かれる道にかかる位置で、土坑が検出された。断面から、土坑が埋没した後に道が形成されたとみられるが、遺物は出土しておらず、用途や時期は不明である。

参考文献

- 佐藤竜馬 1993「香川県十瓶山窯跡群における須恵器編年」『開設四十周年記念考古学論叢』関西大学考古学研究室
 佐藤竜馬、濱野圭司 1995「近世讃岐における土器生産」『研究紀要Ⅲ』財団法人香川県埋蔵文化財調査センター



調査地区全景 道跡（南から）



道跡（南から）



道跡 (東から)



西壁 断面 (東から)



土坑 (南から)



完掘状況（南から）



遺物写真

報告書抄録

ふりがな	たひひらつかいせき							
書名	多肥平塚遺跡Ⅱ							
副書名	多肥上町店舗新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	高松市教育委員会							
シリーズ番号	第226集							
編著者名	高上 拓、佐藤 容							
編集機関	高松市教育委員会							
所在地	〒760-8571 香川県高松市番町一丁目8番15号 TEL087-839-2660							
発行年月日	西暦2021年12月24日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	発掘機関	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
多肥平塚遺跡	香川県 高松市 多肥上町	37201		34° 17′ 41″	134° 03′ 02″	2020.10.26 ~2020.10.28	36㎡	店舗新築工 事
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
多肥平塚遺跡	集落跡	中世以降 時期不明		道跡 土坑		土師器片 須恵器片		
要約	今回の調査では中世以降の道跡と、道の形成以前に掘られ、埋没した用途不明の土坑を検出した。							

多肥上町店舗新築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

多肥平塚遺跡Ⅱ

令和3年12月24日

編集 高松市教育委員会
高松市番町一丁目8番15号
発行 株式会社恵比寿天・高松市教育委員会
印刷 有限会社 中央ファイリング